歌浦っ子だより（学校だより）

「やさしい心　夢かがやく　歌小の子どもの育成」

平成29年　7月　3日　　文責：校長　内野義和

佐世保大空襲について校長講話

６月２９日（木）朝の全校朝会で、校長講話として、子どもたちに次のような流れで話をしました。

①校長先生が若いとき、勤めていた学校の校長先生が、「自分には小学生の時の近所の友達が誰もいない」と言われました。
②どうしてその校長先生には、小学生の時の近所の友達が誰もいないか、わかりますか？
③その校長先生が小学生の時、佐世保大空襲があって、住んでいた町全体が燃え、近所の友達は全員亡くなったからです。
④戦争とはこういうことです。兵隊さんだけでなく、何の罪もない子どもまでが犠牲になるということです。
⑤今から72年前、1945年、昭和20年6月29日、141機のB29が佐世保市上空に飛来し、1200トンの焼夷弾を市街中心部に投下したそうです。焼夷弾によって街は火の海になったそうです。亡くなった人の数は1226人以上と言われています。
⑥この時の様子を表した詩の紹介、このときの街の様子の写真提示、72年後のその場所の写真の提示をしました。
⑦今日学んだこと、これから学んで欲しいことは次のことです。
・戦争の恐ろしさ、悲しさ、平和の大切さ、焼け野原からの立ち直り。
・やさしい心の大切さ（言葉づかい、思いやり、ありがとう、いじわるをしない、悪口を言わない、たたく・けるをしない）

私事ですみませんが、父方の伯父は、戦争に行ってビルマで亡くなりました。祖父の話によると、お骨など来るわけはなく（所属していた部隊は全滅だったそうです）、死亡したとの紙切れだけが来たそうです。母方の叔父（当時小学生）は、戦時中のひもじさから、落ちていた缶詰を近所の子どもと食べ、亡くなりました。その缶詰は殺鼠剤が入っていたそうです。家内の親戚は特攻隊員で、特攻する前にふるさとの佐世保の上空を飛行してきて、何度も旋回したそうです。それを親戚全員で見送ったそうです。それぞれの思いを想像したら、胸に迫ってくるものがあります。

戦争とは他人事ではなく、自分の身内に関わる身近なことなのです。私はこれらの話を我が子はもちろん、担任時代、受け持った子どもにも話しました。子どもには、「みんなの家族、親戚にも先生の話と同じようなことが戦争によって起きていると思うよ。おじいちゃん、おばあちゃん、親戚の人に聞いてごらん」と言っていました。そうすることで、子どもは戦争を身近に感じ、考えていきます。

学校では、６月２９日から８月９日の原爆の日まで平和学習を続けます。

どの学級も発達段階に応じて学習を進めています。戦争と平和についてビデオをみたり、読書をしたりしています。読み語りをした学級もありました。学年によっては、国語で戦争を扱った教材があり、その読み取りをする中で、戦争中の生活、戦争がもたらす悲劇などを理解したり、想像したりすることができたようです。

ただ、実際のところ、これらの学習で本当に実感できるかというとそれは限界があります。と言って学ばないと、伝えないとどんどん戦争は風化していきます。私も戦争を知らない世代ですが、祖父母や両親、親戚から先の話を聞き、戦争の悲しさ、平和の大切さを身近なこととして感じました。やはり、みんなで、未来を生きる子どもたちに伝えていかなければなりません。

ご家庭でもぜひ戦争の恐ろしさ、悲しさ、平和の大切さ、焼け野原からの復興、平和を続けるにはどうしたらよいかなどを子どもたちに伝えてください。よろしくお願いいたします。